

小児慢性肝炎の経過

矢野右人, 松村暢之

要約: 2年以上観察し得た15歳未満の慢性肝炎患者21例につき、経過と予後を検討した。B型肝炎では頻度は少ないが、自然観察例においても治癒率が高く、肝硬変進展例もなく、予後良好であった。非A非B型肝炎の頻度は稀であった。

見出し語: 小児慢性肝炎

15歳未満で2年以上経過観察できた慢性肝炎患者21例につき、経過と予後を検討した。

< B型慢性肝炎 >

本院における初診時B型慢性肝炎患者 407例中、15歳未満は21例 (5.2%) であり、20歳代 (30.7%)、30歳代 (29.0%) に比し頻度は低いと考えられた。21例中、2年以上経過観察し得た症例は19例であったが、デルタ感染を確認し、14歳で肝硬変となり15歳で死亡した1例を除くと、6~14歳の男子15例、女子3例であった。家族歴では母親のHBsAgは6例に陽性であり、6例中5例が同胞にもHBsAg陽性者を認めた。治療は18例中14例に

ステロイド離脱療法を施行し、5例は自然観察例であった。予後は18例中14例 (83.3%) に肝機能正常1年以上の臨床的治癒を認め、3例は現在も肝機能変動中であるが、肝硬変進展例は1例も認められていない。ステロイド離脱療法施行例では14例中12例 (85.7%) が治癒しており、自然経過観察例でも4例中3例 (75%) が治癒していた。また、自然経過で治癒した例でのtransaminaseやウイルスマーカーの推移を検討すると、ステロイド離脱療法と同じく急性再燃後に肝機能正常化、seroconversionしており、免疫賦活を利用したステロイド離脱療法に似た強い免疫応答

国立長崎中央病院 臨床研究部

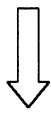
が起こり治癒したと考えられた。以上より、小児におけるB型慢性肝炎は、頻度は高くないが自然観察例においても、小児期は成人に比し免疫応答が強く、ウイルスの排除も可能であり、治癒率が高く、一般に予後良好であると考えられた。

<非A非B型慢性肝炎>

本院における1年以上経過観察し得た147例の非A非B型慢性肝炎患者のうち、15歳未満は2例（1.4%）であり、小児の非A非B型慢性肝炎は非常に稀であると考えられた。うち1例は輸血歴があり、急性肝炎を確認しており、HCV抗体も強陽性（c.o.v 6.5以上）であった。同症例に対しIFN療法を施行し、HCV抗体価は著明に低下（投与前759NU→投与後6カ月178NU）し、肝機能もすべて正常化を継続している。この事は一般に難治性と言われる同肝炎において、小児では治療により予後良好の存在を示唆している。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:2年以上観察し得た15歳未満の慢性肝炎患者21例につき、経過と予後を検討した。B型肝炎では頻度は少ないが、自然観察例においても治癒率が高く、肝硬変進展例もなく、予後良好であった。非A非B型肝炎の頻度は稀であった。